

# 届け 世界の果てまでも

令和3年10月15日

No. 37

文責 校長 飯久保一男

## 平等と公平

この夏、パラリンピックが日本で開催されたこと、日本の多くの人が見たことは、様々な障害をもつ人との「共生」について考えるための大きな意味をもつと感じました。出場した選手が、努力に努力を重ねて、スポーツをする姿に、感動を超えた「尊敬」の気持ちを抱きました。



…他の国で開催されたのなら、一部しか報道されなかったと思います。以前、パラリンピック選手が、自分たちのことは、新聞のスポーツ面ではなく、社会面に載ると言っていました。スポーツと認められていない面すらあったのです。

スポーツの世界だけではなく、様々な分野で障害をもちながら活躍している方は多くおられます。そして、生活の中で、社会人として、親として、地域住民として、障害を抱えながら生活をされている方もたくさんおられます。昨年もこの紙面で書かせていただきましたが、障害をもっている方が、障害を感じることなく過ごせることが真の「共生」だと思っています。

今の日本の中には、障害がある・ないという違いだけでなく、子ども・大人・お年寄りという年齢の違い、男女の違い、職業の違い、肌の色の違い、国籍の違い、貧富の違い、生まれ育った場所の違いなど様々な違いがあります。これらによる差別があってははいけません。憲法をはじめとする様々な法律によって保障されています。ただ、「平等」にすることと、「公平」にすることには、似て非なる違いがあります。

…昨年度の校長通信No.28、29を参照してください。ホームページから見ることができます。

さて、高学年の道德の授業で、次のような問題を出しました。子どもたちはどのように考えたでしょうか。

お店を経営しています。4人のアルバイトが働きました。この4人に給料を払いたと思います。

Aさんの働いた時間は、1時間 でした。

Bさんの働いた時間は、2時間 でした。

Cさんの働いた時間は、3時間 でした。

Dさんの働いた時間は、4時間 でした。

給料の総額は10,000円です。4人にどう分けたいと思いますか。



子どもたちは次の2つの考え方をしました。

<その1> 全員に同じに分ける。

Aさん 2,500円

Bさん 2,500円

Cさん 2,500円

Dさん 2,500円

<その2> 働いた時間に応じて分ける。

Aさん 1,000円

Bさん 2,000円

Cさん 3,000円

Dさん 4,000円

「<その1>の分け方は平等ではない、働いた時間の短いAさんと、長いDさんが同じ給料というのは、おかしい、<その2>の分け方が平等だ」という考えになっていきました。

※子どもたちは「平等」と「公平」の言葉のつかい分けをしていません。

そこで、子どもたちを揺さぶる質問をします。

実は、Aさんは20歳代前半の体格のいい力持ちの男の人で、荷物を運ぶ仕事を1時間やったんだ。  
Dさんは50歳代後半の女の人で、レジを4時間やったんだ。  
仕事の中身が違うけど、Aさんが1,000円で、Dさんが4,000円の給料でいいのかな？

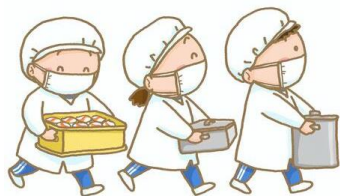
この質問に子どもたちの考えは分かれました。

「Aさんはもっともらっていいかなあ、Dさんは少なくともいいかも」などという考えが出てきます。

「レジだって大変なんだよ、ずっと立ってなきゃいけないし、気をつかうし、間違えられないし、クレームを言う変なお客さんだって来るし…」という考えも出てきます。

最終的には、仕事の中身は違っても、働いた時間に応じた給料でいいのではないかという考えのほうが多くなりました。

これに似たことは、子どもたちの生活の中にもあります。低学年ではそれほどではありませんが、年齢に応じて、性差や体格差が出てきます。高学年では、男子と女子、体格のいい子と小柄な子などといった違いが大きくなり、「平等」にしていたのでは「公平」ではなくなることも生まれてきます。



私が過去に担任した高学年の子どもたちには、給食の準備・片付けの分担は、そのグループに任せてきました。普通、子どもたちは、それまでの学年でしてきたように、給食の食缶や食器などを運ぶ分担は、日ごとの輪番にします。月曜日の食缶は○さん、食器は□さん、火曜日の食缶は△さん…など、1週間を通すと全員が「平等」に同じものを運ぶことになる形をとります。性差・体格差など関係なく、全員が同じ重さのものを「平等」に同じ回数分だけ運ぶことになります。

上の問題を考えたあと、では、給食当番の仕事の分担はどうしたらいいのかと投げかけます。すると、

「重いものを運ぶことと、配膳台やみんなの机をふくことは同じことかもしれない」

という考え方も出てきます。グループによっては、体格のいい力持ちの男子などが

「オレが毎日、(一番重いと思われる)食缶を運ぶよ。その代わりに、女子は配膳台や机をふくのをやってよ」

などと言い出して、輪番で分担する「平等」から一歩進んで、性差・体格差などを考慮した「公平」な形を探っていくことがあります。このグループの考え方をクラス全体に紹介することで、さらに「平等」と「公平」について子どもたちが深く学ぶこととなります。

小学校は、年齢差のある1～6年生が共に生活しています。同じ学年であっても様々な特性の違い、性差・体格差などの違いもあります。その子どもたちが「不公平だ」と思わない集団であるために、本校教職員は努力を続けています。

今年の本校の運動会は20張のテントを立てました。前日の準備は6年生にも手伝ってもらいましたが、片付けは、昼食後に、運動会の疲れもある中、教職員全員で行いました。男女の22歳～60歳が一緒に働きました。

○若手の教職員が率先してよく働きました。ベテランの教職員よりも、たくさん動きたくさん運びました。

何と、移動のときは走っていました。…若いってスバラシイ！

・若手の教職員は「自分たちが働いて、先輩の先生方に無理をさせないようにしよう」と思っています。

「先輩方はズルい」とは誰も思いません。

○力が必要なときは男の教職員がその役を受け持ちました。

・男性教職員は女性教職員がやろうとすると、「ぼくがやりますよ」と声をかけ、引き受けていました。「女の先生たちはズルい」とは誰も思いません。

・その分、女性教職員はテントの脚をしばったり、天幕をたたんだりしました。

…これは、年齢差・性差に応じた「公平」かつ「当たり前」の分担です。

